

『秘中の秘』覚え書き

—その養生術（中世オック語版）について—

瀬戸直彦

はじめに

『秘中の秘』 *Secretum secretorum* という名で知られる一種の百科全書ともいべき作品は、8世紀から16世紀にかけて、アラビア語圏・スラヴ語圏をも含めて西欧のきわめて広範な地域にさまざまな形で流布していた。その写本の数も、これまでの研究文献の量も膨大で、その全体像をつかむのは容易ではない。

私は『中世の時間意識』⁽¹⁾のなかに発表した論文（「人生の四時期—オジル・デ・カダルスとフィリップ・ド・ノヴァール」）の中で、オジル・ド・カダルスというトルバドゥールの作品について、現代のわれわれには理解しがたい異様な内容を含んでいるとした。内容をここで繰り返すことはしないが、私はこの詩の、現代からみると不可解な点が当時の養生術に底流として存在し、とくに『秘中の秘』という書物の養生術の部と関連させて考えることができるのではないかと思うようになった。しかしなにごとに近づけることの難しいテキストであるから、自分なりに理解したことをまとめたうえで、以下にそれを論じてみたい。

1. 『秘中の秘』について

この不思議な名前の書物は、9世紀後半に成立したアラビア語の『秘中の秘の書』 *Kitāb Sirr al-'asrār* が源泉であるらしい⁽²⁾。8世紀のイランの政治の伝統とギリシア・ラテン・ビザンティン文学の伝統を背景にした書物であった。Yahya ibn al-Batriqの作に擬せられている。統治者がいかに政治をおこなうべきかを指南する、イスラムの「王者の鑑」 *Speculum principis* というジャンルが原型にあって、それにさまざまな要素がつけ加えられたものである。ダレイオス王を破りペルシアを征服したアレクサンドロス大王に、アリストテレスが政治・道徳・健康について忠告するという語りの枠構造がすでにそこで成立していた（大王の父フィリッポス2世に招かれ幼少時の大王の教育にあたったのは事実である）。説かれる内容には、神秘学的な哲学論、鉱物の効用を説く金石誌、たぶんに迷信めいた養生の術や人相学といった、現代よりすると怪しげな要素まで雑多な主題をすでに含んでいる。ラテン語写本の前書きには、ギリシア語からシリア語を経てアラビア語版が成立したと記すものがあるが (*transtuli ipsum primo de lingua greca in*

caldeam et de hac in arabicam)⁽³⁾, ギリシア語元版の存在は確認されていない。

アラビア語版には、50以上の写本が残されており、最古の写本断片は941年のものと推測されている。写本の内容を分類すると、7-8巻の短い版(ショート・ヴァージョン)と10巻におよぶ長い版(ロング・ヴァージョン)がある。これらをもとに、さまざまな言語によるヴァージョンが成立するわけだが、それらは翻訳というよりは、むしろ翻案であり、時代が新しくなるにつれて別のスルス(源泉)をとりこみ、ときに一部を削除しながら、『秘中の秘』は「成長」していく。アラビア語の元版(短い版)から直接に俗語に(つまりラテン語を経ないで)訳されたのが、現在まで残るものではスペイン語版やロシア語版(*Tajnyja Tajnykh*)である。スペイン語版は*Poridat de las poridades*と題される13世紀初めの作品で、ヘブライ語のヴァージョン(Judah al-Hariziによる*Sōd ha-Sōdōt*)を経由しているともいわれる⁽⁴⁾。俗語としてはこれがおそらく最古のものであろう。8巻本で5写本あり、のちにカタロニア語に訳されて、『知恵の書』*Libre de la Saviesa*(1276年以前)と題された。

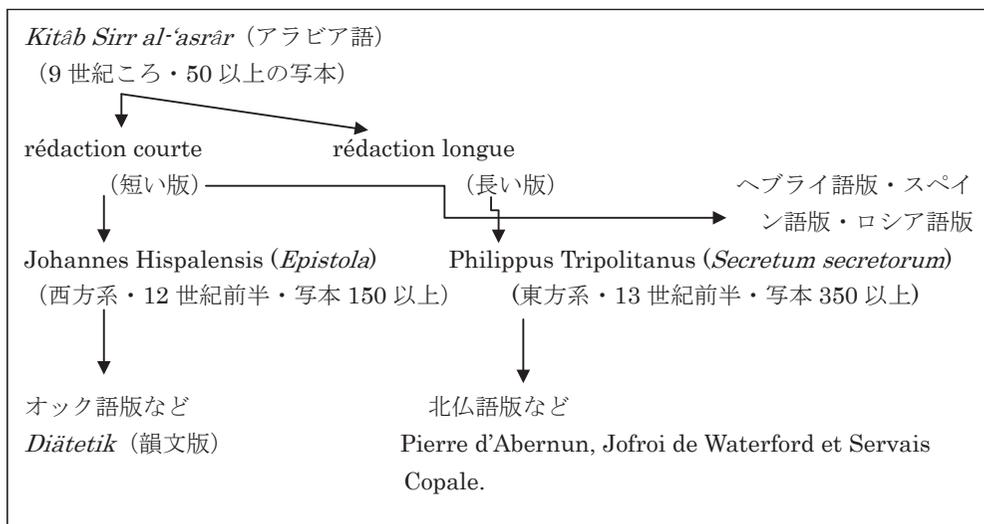
アラビア語版の、主として養生術の部が、12世紀のたぶん前半(1135-1153年ころ)にヨハネス・ヒスパレンシス Johannes Hispalensis (Hispan(i)ensis) (Jean de Séville (セビリアのジャン)とも Johann von Toledo (トレドのヨハン)とも呼ばれる)というキリスト教聖職者によって、ラテン語の短い版にまとめられた。主としてスペインで広まったため、西方系の伝承とみなす。これが第一のラテン語版である。150以上の写本が残っている。1500年以前の、ラテン語による偽アリストテレスの作品群を写本のリストとともに網羅しようと試みたシュミットとノックスによれば、つぎの第2番目のラテン語訳とともに、写本の数は従来の想定を超えているという⁽⁵⁾。第2のラテン語訳は、メーカーの校訂によると全76章という構成であるが、ヨハネスの短かい版は、その29-49章にあたっている。『守るべき養生術についてのアリストテレスからアレクサンドロスへの書簡』*Epistola ad Alexandrum de dieta servanda*(あるいは『健康管理についてのアリストテレスの書簡』*Epistola Aristotelis de regimine sanitatis*)と題されている。ニコラ・ダ・サレルノにより1150-1250年の間に韻文化されているもので、この作品は、俗語ではオック語に訳されたものが、断片を含めると6写本2ヴァージョンで伝わっている。なお北仏語にも4写本3ヴァージョンが、イタリア語に8写本2ヴァージョンが存在する。完全版はオック語2(韻文版)、北仏語2、イタリア語1が残る。

さらに13世紀の前半、たぶん1220-1230年代に、ヴァチカンの東方主座(シリア)の聖職者フィリップス・トリポリタヌス Philippus Tripolitanus (フィリップ・ド・トリポリ Philippe de Tripoli)が全体をラテン語に訳した。アラビア語版の長い版にあたるもので、これを東方系の伝承と呼ぶ。これが西欧の中世にもっとも流布したもので、写本は350以上にのぼる。かのロジャー・ベーコン(1220ころ-1292年後)は、オックスフォードで学んだあと1240年以降にアリストテレスを学びかつ講ずるためパリに留学した。そして1257-1269年ころにかけて、『秘中の秘』の正し

いテキストを作ろうと試みた。内容を4部に分けて段落をほどこし、各章に説明を付して注解を加えて、タイトルを『科学の書10巻』 *Liber Decem Scientiarum* として編纂したのである。ペーコンにとってこれを熟読する経験は、その知的転機となったらしい。知識の有用性と統一性という認識を得たのであった⁽⁶⁾。

北仏語に残るほとんどのヴァージョンは、フィリップスのこの訳がもとである。ロマンス語における『秘中の秘』の写本を網羅的に検討したザミュネールは56写本、12ヴァージョンを確認している（ほかにアラゴン語1、スペイン語3、カタロニア語2、ポルトガル語2、イタリア語15の版を数える）⁽⁷⁾。全訳としてはアングロ・ノルマン方言による13世紀末のフランス国立図書館フランス語写本571 (BnF. fr. 571) という写本がラテン語版にもっとも忠実でもっとも古いとされ、ほかに14世紀の5写本が残っている。部分訳としては、天文学・哲学の部分を削除して、君主の守るべき道徳と守るべき養生術に焦点をあてたものが多く存在し、これらはとくに北フランスで流行したらしい。重要なヴァージョンのなかには、ピエール・ダベルノン Pierre d'Abernun (?-1293) による2384行の翻訳 (BnF. fr. 25407) があり、*Secré de Secrez* と題された。ベッカーレッジが1944年に校訂を出している⁽⁸⁾。1267年以降の訳といわれる。これに似た版で、イタリア語まじりの北仏語版がバツピにより校訂されている⁽⁹⁾。

また、アイルランド人でおそらくはドミニコ会の修道士であったジョフロワ・ド・ヴァターフォール (ウォーターフォード) Jofroi de Waterford と、ヴァロニー (現在のベルギー南部) 人のセルヴェ・コパル Servais Copale による翻訳 (BnF. fr. 1822) があり、これは *Secré des Secrés* と題されている (*de* でなく *des* であることに注意)。モンフランによる校訂はけっきょく出版されなかったので、ラングロワがその大筋を紹介しているものによるしかない⁽¹⁰⁾。二人によるこの翻訳は、翻案の度合いがはなはだしく、宇宙論・天文学・魔術の章は削除して、君主の



守るべき道徳とその養生術、君主のしがえる部下の構成、そして人相学の部分を強調している。ユダヤ人イサック Issac le Juif (Yisshaq b. Slomoh) の『一般的そして個別的食養生』 *Dietis universalibus et particularibus*、マルティン・デ・ブラガ Martin de Braga (510-579ころ) の『気高い生活の規則』 *Formula vitae honestae*、ヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』、トマス・アクィナスのニコマコス倫理学の注解などから記述を補充しているといわれる。

それにしても、この『秘中の秘』は、なぜ西欧でこれほど流布したのであろうか。中世におけるもっともポピュラーな書物とさえいわれるのはなぜであろうか。古代の哲学者のなかでも最大の人物による、古代の最大の王が知っておくべきことについての簡潔なまとめになっているということ、また、たとえ話や謎かけを駆使してたいへんな秘密を明らかにするという魅力的な形式をとりつつ、個々人の養生術や実践的な哲学、そして人のつい惹かれてしまうような迷信をじっさいに集成したということによるのであろうか⁽¹¹⁾。

百科事典的な書物はほかにも存在した。多く読まれたものもあった⁽¹²⁾。代表的な作品にはヴァンサン・ド・ボーヴェの『最大の鏡』 *Speculum majus* 3部作、ホノリウス・ドータンの『世界の似姿』 *Imago mundi*、『プラキデスとティメオの対話』 *Placide et Timeo* やブルネット・ラティニの『宝典』 *Trésor* (1265年ころに最初から古フランス語の散文で書かれた) がある。それらはラテン語から俗語にさまざまな形で訳されることが多かった。ガストン・パリスによれば、みな独創性に乏しく今日ではあまり価値がない。オック語によるものでは『シドラックの書』 *le livre de Sidrac* (元版は北仏語らしい)、マトフレ・エルメンガウによる35,000行におよぶ『愛の時禱書』 *Breviari d'amor* などがある。ガストン・パリスはこれらの教訓的書物を論じたときに、ジョフロワ・ド・ヴァターフォールとセルヴェ・コパルの翻訳による『秘中の秘』について、この作品は興味深い点が多く、かれら独自の見解を挿入しており、ほかのものとは一線を画すと述べている⁽¹³⁾。

ジャック・モンフランは『秘中の秘』の成功した理由を三つ指摘している。アレクサンドロス大王という、俗語でもその事績が物語化されていた英雄に宛てたものであること、王のもつべき美德・送るべき生活の列挙という、当時人気のあったジャンルを体裁としていたこと、そして食養生というみなに興味をもつ主題を扱ったことである⁽¹⁴⁾。養生術にかんしていえば、じつはヒポクラテスやガレノスの発展させた4体液理論などにアラビア医術の衣を着せた内容であるのに、タイトルからして、いかにも秘術であるかのような印象をあたえる。4番目の理由を私なりに付加すると、西欧における東方への憧憬とないまぜになった、知られざる知恵への渴望という要素もあったに違いない。

イスラム世界には、ギリシア語から中世ペルシア語を経て伝わったアレクサンドロス大王についての伝説が広まっていた。フィリップスのラテン語訳の冒頭に、「二つの角をもったアレクサンドロスと呼ばれる、フィリップス [父王] の息子にしてギリシアの王アレクサンドロス大帝に」

(*magno imperatori Alexandro, filio Philippi, regis grecorum, qui Alexander dicitur duo habuisse cornuua*)⁽¹⁵⁾とあるが、『コーラン』にも、アレクサンドロスを指す「二つの角の持ち主」について述べた部分がある（第18章）。12世紀末から13世紀初めに作られたペルシア語の詩集『アレクサンドロスの書』（ニザーミー・カンジャウィー）はたいへんに著名であったという⁽¹⁶⁾。

中世フランス語によるアレクサンドロス大王についての伝説については、これをあつかった物語群が、いわゆる宮廷風物語の成立以前から北仏語に存在していた。ポール・メイエルによる各ヴァージョンの校訂と研究がすでに19世紀の後半になされている⁽¹⁷⁾。メイエルは其中で、人々に愛好されたのは、アレクサンドロスの驚異的な冒険の数々だけではないと述べている。驚異の要素は、2-4世紀に成立したラテン語版（偽カリステネス作とされる）⁽¹⁸⁾にすでに現れていた。むしろ、この王を、騎士道を実践する気前の良い主君、封建制下の理想の君主像にしたてあげていることこそ12-13世紀のガリアの人々に受けた理由である、と主張している。ラテン語によるアレクサンドロス大王についての物語はほかに、クイントゥス・クルティウス・ルフスによる翻案（2世紀ころ）が俗語に多く訳され、西欧におけるアレクサンドロス伝説の形成に大きく寄与したといわれる⁽¹⁹⁾。メイエルの研究には、アレクサンドロスからアリストテレスへの書簡という体裁の作品群については言及があるものの、アリストテレスからアレクサンドロスへの忠告という『秘中の秘』の体裁については触れるところがない。

じっさい読者の好奇心をそそる『秘中の秘』という題名じたいが魅力的である。それに惹かれてこれを読んだ読者は、しかし失望したかもしれない、この書のなかの養生術などに典型的に記される実践的なアドバイスの、その裏にひそむ一貫した原理的説明が秘密といえば秘密なのであろうか、とマンザラウィは自問している⁽²⁰⁾。しかし、旧約聖書の『雅歌』*Canticum canticorum*のタイトルをなぞったのかもしれない⁽²¹⁾この作品には、意外な知恵がちりばめられているからこそなのではないだろうか。ロジャー・バーコンはこのタイトルを錬金術に関連させて説明している。北仏語版 BnF. fr. 571 (fol 125ra-vb) では、書簡の始めにこのような記述がある。「そなたが求め知りたいことは、秘密このうえないことで、人間の心ではほとんど理解しがたいことなのだ。だからいかにして、死すべきこの皮（羊皮紙）にその秘密を表現できようか。（中略）そのためにこそ神のご加護のもとに、秘蹟をそれが私に提示されたとおりに明かしたのである」⁽²²⁾。

2. オック語による養生術

アレクサンドロス大王にあてて養生術を説くという体裁の教訓詩は、俗語ではとくにオック語版に残っていると先に述べた。スュシエとルツジェリにより、ともに「食養生」（*Dietetica* (*Diätetik*）というタイトルで、二つの韻文版が校訂されている。語り手の「私」が、ヒポクラテスとガレノスの残した本から抽出した医学の高尚な術 *la nobla art de medicina* (v.6) をアレ

クサンドロスに語るという形式であり、その語り手がアリストテレスであるとは書かれていない。しかし当時の読者・聴衆にはここで教訓を説くのがアリストテレスであることは自明だったに違いない⁽²³⁾。

ガレノスは紀元後129-200年ころのギリシアの医学者であり、紀元前4世紀のアリストテレス（やアレクサンドロス）よりもはるかに後代の人であるから、時代錯誤であるが、そのもとになったラテン語のヴァージョンでは、あとで検討するようにヒポクラテス（紀元前400-370ころ）もガレノスも登場せず、もっぱら哲学者のアリストテレスがアレクサンドロスに語った内容とされている。

私はこのオック語版を一読して、語り手である「私」がアレクサンドロスにたいして健康を保つために勧めるその養生術の内容に驚いた。四季別に健康法を説くなかで、冬においては何よりも身体を温めることが大事だと述べたあとに、「そしてそなたの掛け布団の中に新鮮な色艶をもつ美しい女性を入れるように」とあるではないか。この一文を見てそれがあまりに唐突なために、私はこの *bela domna* (v.318) を最初そのままにはとる勇気がなく、比喩としての麻薬の一種（ペラドンナ）を飲むことなのかと思ったほどである。しかし麻薬という意味は15世紀にローマの貴婦人が化粧に用いた植物を指してできたらしいし、仔細に読んでみると、テキストの文脈からも、どうやら字義どおりにとるのが正しい。この部分の内容に驚いたのは私だけではない。長い版に取りこまれたフィリップスのラテン語をつうじてではあるが、これに注解を付したロジャー・ベーコンも驚いた。彼はのちにこの療法につき何度も言及しているという⁽²⁴⁾。

オック語による『秘中の秘』は、前述のようにヨハネス・ヒスパレンシスによるラテン語訳（1135-1153年ころ）を俗語に直したものであった。もともとが養生術についてのアレクサンドロスへのアリストテレスの書簡としての部分訳であった。4つの韻文版と2つの散文版という独立した2ヴァージョンに分かれる⁽²⁵⁾。散文版のごく短い断片（バーゼル大学図書館本 D.III.11, f.163v）がヴァッカーナゲルにより1845年に報告されているが、これはフィリップスの L30 に対応する部分と思われる。

韻文版は2篇が校訂されている。ひとつはヘルマン・スュシエが活字にした13世紀のハーレイ写本（London, British Museum, Harley 7403, fol. 49r-62v）である（1883年）。スュシエは1894年にこのテキストを別の3写本と校合しているのので、この新版に依拠してこのテキストの一部を検討してみよう。ハーレイ写本では、全448行のうち、四季における養生を説く247-312行に該当するが、1894年版では底本に欠けた6行を別写本により補ったので、全456行となり、この部分は255-320行となる（1883年版の原文の行数は（ ）内にしめす。試訳は原文の平韻8音綴2行を1行にまとめて掲げた。1894年版の該当するおおよその行数を（ ）内にしめた）。

Las quatre temporas de l'an 255
non vueil que t'annon oblidan,

co es primavera e estieus,
automp e yvern ab sas nieus. (250)

Primaveira es plus tempratz,
e adoncs es grans sanitatz 260

de mecinar o de sancnar
o de belhas domnas baisar,
o de manjar condutz tempratz (255)

que ajan bonas qualitatx,
calletas grassas o perditz 265

e ueos tenres e pols farsitz
e laig de cabra al disnar
e laychuguetas al sopar. (260)

En estieu contra la calor
es bona causa de frejor, 270

ab vin aigre carn de vedel
o de bon cabridet novel,
milgranas o pomas aigretas (265)

e cocombres e cogorletas,
ab bon jus vert o ab agras 275

la carn ol pei que manjaras.
Adonchas no's deu hom sagnar
ni *ab las donas deportar,* (270)

mais ab tot lo meins que poira;
car qui o fai dan i aura. 280

E deu s'om atressi gardar
en aquel temps de trob manjar.
Segon estieu es la partia (275)

d'automp que fai melencolia;
uns terminis es de sequor 285

naturalmens e de frejor.
Adonchas deu hom plus manjar
qu'en estieu, e deu hom usar (280)

caudas causas e humorosas

- e dousetas e saborosas, 290
 aissi com son razim madur
 e figuas dousas ab vin pur,
 e grasses moutos de dos ans (285)
 e pollas e aucels volans
 ab bon jussel, en qu'om molra 295
 de gigimbre o de safra.
 Adonchas deu hom esquivar
 cauls e totz liüms per manjar, (290)
 mais mezinhas e purgament
 donan adoncs gran leujament, 300
 e adonchas val mais amors
qu'en estieu cant fai grans calors.
 Apres ven hyvern ab lo freig, (295)
 que moutas res ten en destreig.
 Adonchas deu hom pron manjar 305
 el cors moure e escalfar
 et esser pres de la cosina
 e manjar tota salvasina (300)
 e far raustir sobre ls carbons
 gallinas e gails e capons, 310
 e manjaras raust e panadas,
 aste de porc e carbonadas,
 que sian trastug salpicat (305)
 d'especias e empebrat,
 e beu bons vins et bons pigmens 315
 per contrastar als elemens,
e rescon sutz ton cobertor
bela domna ab fresca color, (310)
e non poinhes d'austra mesina
adoncs que non i a tan fina.⁽²⁶⁾ 320

一年のうちの四時期について そなたは忘れてはならない
 それは春と夏と 秋と雪の降る冬である

春はもっとも温暖で したがって養生するにも (260)
 瀉血をするにも あるいは美女を抱くにも
 また滋養のある 暖めた食物をとるのも
 太らせた鶏やヤマウズラ (265) 柔らかい卵や詰め物をした雄鶏
 昼食に山羊のミルク 夕食にはレタスをとるのも健康によい
 夏には暑さに対して 冷たいものがよい (270)
 酸っぱいワインで子牛の肉や 生まれて間もない子山羊
 酸味のあるザクロやリンゴ キュウリやカボチャ
 おいしいブドウやブドウのジュースとともに (275) 肉や魚をとるのがよい
 この季節には瀉血すべきではないし 女性たちと戯れてはいけない
するにしても最小限にすべきで うっかり行くとひどい目にあうだろう (280)
 この季節に食べ過ぎることは 控えるべきである
 夏のつぎはメランコリー (黒胆汁) を生む 秋の領分で
 自然の理によりたいへんな乾燥と (285) 寒冷の季節である
 したがって夏よりも人は たくさん食べる必要があり
 暖かく湿った甘くておいしいものを とるべきである (290)
 たとえば生のワインとともに 熟れたブドウと甘いイチジクを
 さらに2年太らせた羊とか 鶏や飛ぶ鳥を
 胡椒やサフランを挽いた (295) 美味なソースで食したいものである
 そしてキャベツなどすべての野菜は 食物としては避けるべきで
 むしろ薬草や下剤をとれば ずっと楽になる (300)
 そしてこの時期の愛の交歓は夏の 大変暑いときよりも健康によい
 そのあとに寒さでもって 多くのものを窮地に陥れる冬がやってくる
 このときは人はひたすら食べて (305) 身を粉にして暖め
 キッチンそばから離れず あらゆる獣肉を食し
 炭火の上で雌鶏や雄鶏や去勢鶏を ローストさせて (310)
 あぶり肉やパイや 豚 [の串焼き] や グリル焼きを食べなさい
 それらに香辛料と胡椒を たっぶりふりかけるのを忘れないように
 それからよいワインと (315) おいしいハチミツ入りスパイスワインを
 自然の影響に対抗するために 飲むように さらに
さらにそなたの掛け布団の中に 新鮮な色艶をもつ美しい女性を入れるように
そしてこれほど純粋な薬はないから ほかの治療薬には頼らないこと (320)

このように律儀にも各季節にわたって、女性とのいとなみの是非が説かれている。しかし仔細に読むと、春夏秋と冬における忠告は性質が少し異なる。冬におけるそれは腹を温めるために女性を養生術に使っているようである (vv.317-320)。わざわざ「布団」*cobertor* と記していることに注意したい。このモチーフというかトポスは、シュナミティスム *shunam(m)itisme* と呼ばれているらしい。旧約聖書『列王記』上 I, 1-4によれば、ダビデ王は晩年になり老齢のために服を重ね着して寒さをしのいでいた。体がそれでも温まらないため周囲の進言により、若い乙女をふところに抱いて休むことにした。性的な関係はなかったことで、ダビデの不能と老いが明白になったわけである。その女性はシュナミ (シュネム) 生れのアビシャグ *Abisag Sunamite* という名であったという。

1420-1450年ころの写本 (Vatican, BAV. Barberini, lat. 311, fol 19ra-22va)⁽²⁷⁾によったルッジェリの版のほうは、若干短い393行で、この部分はその208-285行に対応している。大筋は同じだが、夏の養生術がずっと短く、愛を交わすことの良し悪しについても夏と秋の項には書かれていない。しかし問題の冬の養生術は：*E haies sotz ton cubertor Bella dopn'ab frescha color, E no cura d'altre medecina Car al mon no n'a tant fina.* (vv.282-285) とあって、読みに大差はない。言語上の特徴はカタロニアに隣接するオック語地域を示唆しているという⁽²⁸⁾。この写本全体についてはザミュネールにも詳細な研究がある⁽²⁹⁾。なお前述したバーゼル大学本の散文断片にはこのくぐりはない。

3. ヨハネス・ヒスパレンシスによるラテン語訳

それではこれらのオック語版のもとになったラテン語訳でのテキストはどうであったらうか。ヨハネス・ヒスパレンシスがラテン語に訳した『書簡』は、1135-1153年ころのものとされている。ヨハネスは、キリスト教に改宗したユダヤ人医師で医術書や天文学書をアラビア語から翻訳した *Jean Avendeath* (*Avendear*) (*Ibn Dauth*) という人物のこととされていたが、現在ではセビリア生れのキリスト教聖職者で、ルナ *Luna* に滞在したことがあり、アラビア語から直接にラテン語に訳したとされている⁽³⁰⁾。最初の印刷本は1490-1495年ころライプチヒで刊行された。

校本はいまだに、ヘルマン・スュシエの1883年のものと、J. プリンクマンによる1914年の学位請求論文しかない⁽³¹⁾。前者は、オック語版を収録した『プロヴァンス語の文学と言語の文化遺産』の付録である⁽³²⁾。この校訂本は、オック語作品のなかの、抒情詩以外の韻文を対象としたもので、第一巻で中絶している。時代的な制約を考えれば、かなり信頼に値するものであるが、付録としてのラテン語のこの版については、150近く残る写本のうちの9写本を比較校合したものであった。底本は *London, British Library, Burney 360* (fol.49(47)vb-54(52)va) (15世紀) であり、1501年のアレッサンドロ・アキリニ *Alessandro Achillini* による、ヘブライ語版による追加部分をも含めたボン版 (印刷本) をも参照している⁽³³⁾。いっぽう後者はミュンヘンのバイエルン州立図書

館本 Clm.4622 (fol.47v-50,13世紀) を底本にして1914年に公刊された医学史の学位請求論文である。スュシエが希望していたのはうらはらに⁽³⁴⁾、完全な校訂版はその後130年近くが経過しても現れていない。1982年には M.-Th. ダルヴェルニが、スュシエの用いた写本にはなかった、よりよい写本(序文つき)の存在を指摘している。エディンバラの National Library of Scotland, Advocates 18.6.11 という医学書を集めた写本の中に、ガレノスの作品の前に記されているという⁽³⁵⁾。1994年には、ルチッラ・スペチアが、新たに発見されたザグレブ写本 (Biblioteca Metropolitana di Zagabria, MR 92, fol. 55v-56r) によるテキストを校訂している⁽³⁶⁾。13世紀の最後の四半世紀にパドヴァで作られたらしい。四季の養生術を中心とした部分訳である(スペチアの校訂でわずかに110行)。

スュシエのテキストに戻ろう。テキスト全体を内容から二つに分けている。まず「ヒスパニア人たちの女王」にあてたヨハネネスによる献呈辞と翻訳のいきさつが記される(スュシエはこれを第1部とする)。T という頭文字だけで記されるこの女王はテオフィナ Theophina あるいはタラシア Tharasia のことで、カスティリヤのアルフォンソ6世の娘テレーサ・ド・ポルトガル(?-1130) のことだとも言われるが定かではない。アリストテレスから大王へのこの書簡は、アラビア語で *Cyretesar*, すなわち『秘中の秘』(*Sirr al-'asâr*) という本から抜いてきたものだという。ヨハネネスは、ギリシア語からアラビア語に訳されたものを自由にラテン語にしたとことわっている。

そのあとに、アリストテレスの書簡(スュシエの第2部)がくる。それは養生術の部そのものである。あとで検討するフィリップス・トリポリタヌスのラテン語訳にある、食事のあとの午睡の勧めについての記述は、柔らかい寝床で一時間ほど最初に右を下にして、ついで左を下にしてゆっくり休むがよい(176-79; ブリンクマン版 1.112-114; ザグレブ写本 159-61) とある。しかし美女を布団にいれるといった、腹を温める養生の必要性は記されていない。

段落を変えて、アリストテレスはアレクサンドロスに、一年の4時期を入念に見張らなくてはならないと述べる。そして四季の過ごし方を伝授する。各季節における愛の営みを「ウエヌス」*Venus* という単語を用いて婉曲に語っているので、その部分を検討してみたい。

春は湿気と暖気の時期であり、これこれの食物をとるようにと指示したあとに「じっさいこの季節ほどよい季節はないし、瀉血に便利な季節はない。そして春には、ウエヌスの行為と身体を動かすことが役に立つ。そして腹をこなれさせ風呂に入り汗をだし、香料入りの飲み物をとるのが消化のためによい。すなわち下剤をかけることが必要なのである」*Nullum enim, tempus eo melius vel utilius ad minucionem et proficit in eo usus Veneris et motus corporis et solutio ventris et usus balnei ac sudoris et pocionis specierum ad digerendum, id est prugatoria accipienda sunt;* (l. 102-106; ブリンクマン版: 1.137-141; ザグレブ写本 181-84) という。

夏は温暖かつ乾燥の時期で(中略)、「ウエヌスはちょっとだけ実践されるべきであり、そして

特別の必要がないかぎり、瀉血しないように」*Et Venus exerceatur in parte, et abstinence a minucione nisi necessitas coegerit* (l. 117-118; プリンクマン版: 1.149-151: (…)*Venus parce exerceatur*; ザグレブ写本 1.94-95: (…)*Et Venus exerceatur parce* 「そして節制してウェヌスは行われるべき」).

秋は冷気と乾燥の季節であり、黒胆汁 *colera nigra* が増加する。とあって食物の注意を述べたあとにこうある。「そして黒い胆汁を生み出すようなすべてのものを控えて、運動やウェヌスの行為は夏におけるよりも長くおこなうべきである。風呂や下剤はもし必要なら使うように」…, *atque abstinence ab omni quod generat coleram nigram, et motus corporis atque usus Veneris magis stet quam in estate. Balneum et purgatoria si necesse sit usitentur* (l. 124-127; プリンクマン版: 1.156-159; ザグレブ写本 1.99-102).

このあとに冬の季節がくる。すなわち冷気と湿気の季節であり、過ごし方も変えなくてはならない、と指摘して、食物の注意のあとにこうある。「どうしても必要という場合をのぞいて、腹を柔らかくしすぎたり瀉血したりしないように。イチジクとクルミと赤ワインと温かい舐め薬を最大限とるように。そのときは空気をほどよく温めて、自分を暖かくするのがよい。そして熱い香油をまず身体に擦りこまなくてはならない。この季節にはウェヌスの実習や運動は、消化の助けになるから、邪魔にはならないし、消化力が弱らないように、食べ過ぎは禁物である」*Abstinence a solutione ventris ac minucione sanguinis, nisi magna necessitas coegerit. Ficus quoque et nuces et vinum rubeum et optimum sumantur et electuaria calisa. Tunc oportet temperari aërem, id est calefacere se. Nec impedit hoc tempore exercitium Veneris et motus corporis, quod digestio fit valida, nec habundancia cibi utaris, ne digestio debilitetur* (1.132-138; プリンクマン版: 1.163-169: *Nec impedit hoc in tempore usus Veneris et motus corporis* (...); ザグレブ写本 1.107-110: (...) *parcatur Veneri et motu corporis* 「ウェヌスと運動は控えるように」).

この引用の *Nec* 以下は、*impedit* という直説法の現在 3 人称単数形がこのままでは意味がとりにくい。プリンクマン版も同じ。ザグレブ写本では思い切った省略と言いかえがみられる。後置の名詞ふたつを主語ととり他動詞の絶対的な用法として、「邪魔をしない」、「すべきである」、ととるしかなさそうである。ここは問題のある個所のように、別の写本では *Nec impedit in hoc tempore motus corporis nec habundancia cibi eo quod digestio sit valida* (BL, Harley 978) 「この季節には、消化力を高めるために、運動も過食も邪魔にはならない」あるいは、*Neque ventris neque cibi habundantia utaris ne digestio debilitetur* (Alessandro Achillini) 「腹や食物の過剰はあってはならない、消化力が弱まらないために」といった読みがある。いずれにしてもオック語版における冬の養生術とは異なり、ウェヌスを推奨するだけである。

4. フィリップス・トリポリタヌスによるラテン語訳

フィリップスのラテン語版は、ウルムスの研究によれば現存するものだけでも287写本を数える⁽³⁷⁾。一説には350以上あるともいわれる⁽³⁸⁾。ロジャー・ベーコンだけではなく、該博な知識にかけては並ぶものがないといわれたアルベルトゥス・マグヌス（1206-1280）の参照したのが、このフィリップスの版であった。ジル・ド・ローム（1245-1316ころ）はこれを利用して、自分の弟子であったのちのフィリップ4世美麗王（在1285-1314）に『君主の統治について』*De regimine principum*を捧げた。ヨハネスの部分訳が医学書のなかに入って12世紀中に流布していたとすると、フィリップスもそれを参照してテキストを作ったことは十分考えられる⁽³⁹⁾。最初の印刷本は1472年ころのケルンの版であった。

現在のところ、ラインホルト・メーラーの手になる校訂版（1963年）がもっとも使いやすいとされる⁽⁴⁰⁾。ヒルトガルト・フォン・ヒュルンハイムがそれを中世の高地ドイツ語に訳したものの校訂に見開きで付されている。テュービンゲン、プロシア文化財団（国立図書館寄託、旧プロシア国家図書館、ベルリン）Cod. lat.70という14世紀の写本が底本で、(fol.1-37v), Lという頭文字で、数字を加えて章を指すのが通例である。メーラーの版の出る前には、ロバート・スティーラーによる、ロジャー・ベーコンの注釈つき写本の校訂が基本書であった（1920年）。これは13世紀に作られたOxford, Bodleian Library, Tanner 116 (fol. 26v-130v)を底本にしており、本文下段にベーコンの注釈が、また欄外には英語による編者の要約がある⁽⁴¹⁾。

先行するヒスパニアのヨハネスの翻訳が、養生術に限られた部分訳であったのにたいして、こちらははるかに量の多い一種の百科全書に成長している。その内容は、書簡の経緯や内容が秘密である理由の説明（L 1-3）のあとに、

- I 王者への教訓（L 4-26）
- II 養生術（L 27-58）
- III 神秘学的な色彩の濃い哲学めいた忠告（L 59-74）
- IV 人相学 *physiognomie*（L 75-76）

という4部門に分けられる。雑多な内容を整理したのはロジャー・ベーコンであった。メーラーの校訂によれば76章におよぶ。第32章にはこうある。

Cum tu vero refectus fueris, incede super stramenta mollia. Deinde temperate dormi et requiesce una hora super latus dextrum, deinde ad sinistrum revertet et super illud dormitionem perface, quia latus sinistrum frigidum est et ideo indiget calefactione..

Si ergo sentis dolorem in stomaco et in ventre, tunc medicina est tibi ponere *aliquid calefactivum*.. Si vero sentis eructuationem acerbam,, signum est frigiditatis stomachi,, huius rei medicina est bibere aquam cum siopo acetoso et evomere, quia incarcerationis cibi corrupti in ventre est valida corporis destructio..⁽⁴²⁾

[食事のあとに] 本当に元気が出たら、柔らかい藁布団の上に赴きなさい。それから気持ちよく眠り、一時間右を下にして、それから左に体をひねり休み、その布団の上で睡眠をとるように。というのも左側が冷えているから、温かくすることが必要なのである。したがってもし胃と腹に苦痛を感じたら、そなたに必要な治療法は何か温かくするものを置くことである。もしじっさいひどい吐き気を感じる場合は、胃が冷えている証拠であり、その治療のためには、酢のように酸っぱいシロップを入れた水を飲み吐いてしまうのがよい。というのも腹に腐敗した食物が滞留するのは身体を壊すことに直結するからである。

メーラー版の異文欄を参照すると、ここの「何か温かくするもの」*aliquid calefactivum*の代わりに、C写本（1501年の印刷本で、アレッサンドロ・アキリニ Alessandro Achilliniによるボン版のこと。13世紀中葉の写本をもとにしているといわれる⁽⁴³⁾）では、「腹部の上に重みのある温かい布地あるいは温かい美しい娘を抱くことが」*super ventrem camisam calidam ponderosam aut amplecti puellam calida speciosam*とある。

この部分は、ロジャー・ベーコンの注釈付きの版では、以下のようなテキストになっている（第II部第6章）。

Cum vero tu cibo refectus fueris et a prandio erectus surrexeris, ascende super stramenta mollia, deinde temperate dormi, et requiesce primo una hora super latus dextrum deinde ad sinistrum revertere, et super illud dormicionem perfice, quia latus sinistrum frigidum est et ideo indiget calefaccione. [Hoc intelligendum est in sanis et bene dispositis, set debiles debent primo dormire super latus sinistrum, sicut docet Avicenna, et secundo super dextrum et in fine super sinistrum ut hic dicit.]

Si igitur sentis dolorem in stomacho et in ventre vel gravitatem tunc medicina necessaria tibi est *amplecti puellam calidam et speciosam*, aut ponere super ventrem camisiam calidam ponderosam, vel saccum plenum avena calefacta, vel tegulam calefactam involutam in panno lineo triplicato, vel pulvinar calidum⁽⁴⁴⁾.

じっさい食事で元気が出て、そして昼食により精力を回復し立ち上がったなら、柔らかい藁布団の上に乗いなさい。そのあとゆっくりと眠って、さらにまず一時間は右を下にして、それから左に向きを変えなさい。そしてそのうえでたっぷりと眠りなさい。なぜなら左側が冷えていてそれゆえ温かさが必要だからである [(ベーコンによる注：) これは健康的でよい仕方で睡眠をとることと理解すべきである。しかし虚弱な人は、アヴィケンナの教えるように、まず左を下にして、そして次に右を下に、最後に彼がここで述べるように、また左を下にして眠るべきである]。ゆえに、もし胃や腹に痛みあるいは重みを感じる如果能够あれば、そなたに必要な治療法は、温かい美しい娘を抱くか、あるいは腹の上に温かくて重みのある

布地を置くか、あるいは熟した燕麦を満たした袋か、あるいは亜麻布を三重に折って包んだ布団か、あるいは温かいクッションを置くかしなさい。

ジャック・モンフランは、フィリップスのラテン語版養生術の部(L27-58)について、先行するヨハネスの養生術の訳を増補して挿入している部分があると指摘し、それはL29-43であるという。また、L36-40における四季別の養生術の説明は、フィリップスのオリジナルな部分であるとも述べる⁽⁴⁵⁾。しかしメーラーの校訂によるかぎりには、この四季における養生術は、さきほど引用した部分に対応する個所を比較してみれば、ヨハネス・ヒスパレンシスの敷き写しである。春については(L37)多少省略された部分があるものの、夏(L38)、秋(L39)、冬(L40)のテキストはきわめて近い。

ヨハネスのザグレブ写本を校訂したスペチアは、フィリップスのテキストとヨハネスのテキストは混淆しているように思われるという⁽⁴⁶⁾。100年近い時代差があるはずなのに、ヨハネスの写本のなかには、フィリップスの写本から引いてきたくだりまであるらしい。いずれにしても写本の数がいずれも数百におよぶので、独自の部分と借用の部分について確かなことはいえないのが実情なのであろう。アラビア語版から直接に訳されたスペイン語版でも、この部分はフィリップスのテキストに対応している⁽⁴⁷⁾。グリニヤスキの見解では、フィリップスはアラビア語元本をアンティオキア付近で発見し、南フランスでラテン語に訳したという。そのラテン語からみるにフランス語を母語とする聖職者だからという⁽⁴⁸⁾。この見解にはわかには受け入れがたい。

5. 北仏語訳の『秘中の秘』

古仏語ヴァージョンのなかで最も古いとされるピエール・ダベルノンの版(アングロ・ノルマン方言)は、ベッカーレッジの校訂で読むことができる。2384行のうちで、1867行まではフィリップスのテキストにだいたい従っている。しかし、養生術のうちの四季の健康、体の各部分の解説、水とワインについて、風呂の入り方、薬石や植物、五感、そして養生術はあるが、王のとりまきの構成、官僚の選択、人相学の部分は省略されてしまっている。そして訳者自身がこの翻訳は未完のままだとことわっている(「この提要について私はこれ以上は見つけられなかった。しかしもっと存在することは自分にはよくわかっている」vv.2238-2239)。これまで検討してきたような、胃のもたれを解消するための女性とか、四季におけるウェヌスについての注意はでてこない。

いっぽうジョフロワ・ド・ヴァターフォールとセルヴェ・コパルの版は、モンフランによる校訂が出版されなかったために、写本による以外は、ラングロワの紹介によるしかない。それにしたがえば、やはりこの部分はないようである。女の一生を四季にたとえる部分は訳されているものの、オック語版に見られるような記述はない⁽⁴⁹⁾。

ところで『秘中の秘』はジャック・モンフランとは因縁がある。ジョフロワらによるその中世

フランス語訳についての研究と校訂の試みは、モンフランの古文書学校の卒業論文（1947年）であった⁽⁵⁰⁾し、前述のようにそのテキストの校訂も準備していた。古仏語訳の別の版がベッカーレッジにより刊行された時には、いちはやく書評を執筆している⁽⁵¹⁾。1982年の論考は、久しく手をつけていないこの『秘中の秘』について、IRHT（テキストの歴史・研究文書館）の研究員の Claude de Tovar 夫人との共同作業であった。ラテン語訳と俗語版についてそれまでの研究史をてぎわよく整理し、とりあえず、フィリップス・トリポリタヌスのラテン語元版では第4章（L4）にあたる、知恵と美德を語る部分、そして第30章（L30）の、君主が朝起きた時にすべきことについての部分の、古仏語版のさまざまな写本の読みを検討している。この論考の冒頭でモンフランは、中世北仏語文学のなか（この分野のみであることに注意したい。大風呂敷は広げない）での『秘中の秘』の位置を確定するには、以下の作業が必要なはずであるとして4点を列挙している。すなわち：

- 1）ラテン語のヴァージョンがフランス語作家におよぼした影響とどのようにラテン語の版を利用したかを吟味すること。
- 2）古仏語訳をリスト化して、それらの書かれた場所と性格を正確にしめすこと。
- 3）その翻訳の流布の様子の研究。そのためにはそのコピー（写本）と古いカタログにおける写本の記載を精査し、できれば所有者まで同定する必要がある。さらに古仏語の作品における『秘中の秘』の引用を、引用であることが明記されているにせよいないにせよ、調査する。
- 4）最後に、古仏語だけではなく、西欧中世ぜんたいの俗語における翻訳の伝播のしかたをも探ること。

正攻法の研究法としかいいようがない。個人でできる範囲を超えている。いまのところこのような計画を果たすことは自分にはできないので、とりあえず古仏語の翻訳の表面的な歴史を概説してみたい、というのがモンフラン（と協力者ド・トヴァール夫人）の1982年のこの論文の意図であった。むしろジョフロワとセルヴェ・コバルのテキストを先に出してほしかった、というのが私の正直な感想である。

ロマンス語における『秘中の秘』の写本を精力的に調査しつつあるのがイラリア・ザミュネールである。これまでたびたび引用してきた2005年の論考では、言語別（アラゴン語、カスティリア語、カタロニア語、北仏語、イタリア語、オック語、ポルトガル語）に多数の写本を、ヨハンネスの系統（西方系）とフィリップスの系統（東方系）に分けたうえ網羅的にリスト化している。貴重な研究といわなくてはならない。

『秘中の秘』のなかで、アリストテレスがアレクサンドロスに警戒するように促していることは多々ある。東方系の長い版のなかでとりわけ目立つのは、毒娘 (Pucelle venimeuse, Giftmädchen) についてであろう。アラビア語版、スペイン語版にもすでに存在しているモチーフである⁽⁵²⁾。フィリップス・トリポリタヌスの版では第25章にあたる (L25: De puella venenata)。「幼少時より蛇の毒で育てられて、本性が蛇のそれになってしまったきわめて魅力的な娘」*venustissima puella, que ab infantia nutrita fuit veneno serpentum ita, quo sua natura fuit conversa in naturam serpentum* で、これと交わるとたちまち殺されてしまうという。

この毒娘の存在 (西方系のオック語版にはない) と、腹を温めるために美女を布団のなかに入れるという養生術は、ある意味で同一の文脈においてとらえることができるだろう。すなわち、暗殺と治療という正反対の目的ではあっても、女性を道具としてあつかっている事実である。これは女性蔑視にほかならない。またセクシュアルな文脈 (フィリップス・トリポリタヌスは毒娘の記述で *coitus* という語まで用いている) であることにも注意したい。考えてみれば、女性の一生を四季にたとえて、秋や冬を老婆の貧相な描写にあてるというくんだりも、男性の読者・聴衆にとってはさぞ面白かったことであろう⁽⁵³⁾。この種の興味も『秘中の秘』というタイトルになるゆえんである。女性蔑視の思想、とくに古代・中世の修道僧による特殊な文化環境を推定させるこの毒娘のトポスは、インドの説話が起源ともいわれる大きなモチーフであるから、いまここで詳細に検討することはひかえておこう。

女性を用いた胃の養生術のほうは、公序良俗に反するというで、ラテン語版由来のヴァージョンの一部からは削除されている。それだけに一部の聴衆の興味をもさそったことであろう。2003年に出版されたスティーヴン・J・ウイリアムスによるラテン語ヴァージョンの受容、とくに宮廷や教皇庁での反響についての研究では、おそらく「過度の宗教的配慮 *overactive religious conscience* により」胃や腹の痛いときは若い美女を抱いて寝るがよいというくんだりも、俗語版より削除されたのだろうという⁽⁵⁴⁾。しかしこれまでみてきたように、オック語版のテキストには残っているのである。ウイリアムスはここで、スティーブの編纂したフィリップス・トリポリタヌスのテキストのみを引用しているが、どの写本にこの部分が残る、どの部分に残っていないかという調査を、そもそもラテン語の版でもおこなっていない。なるほどメーカーの依拠したラテン語の写本にはこの部分が存在しない。しかし異文欄には、もちろんメーカーもことわっているとおり、いくつかの写本が提供する異文のみではあるものの、このくだりを含むヴァリエントが掲載されているのである。

オック語による養生術について、スュシエの1894年版と、これから出るであろうザミュネールの校訂をもとに、北仏語版やラテン語版ひいてはカタロニア語版との地理的・年代的な関連ならびに内容上の相違をより詳しく検討する必要があるだろう。オック語韻文版の雰囲気は、オジル・デ・カダルスに近いものがあるように思われる。オジルの作品が一見いかに奇異にみえ

たとしても、その謎めいた部分を『秘中の秘』にあらわれるトポスとしてみてとれば、それほど奇異な作品ではないことがみてとれるのではないか。また、教訓詩という枠組み、とくに語り手による聞き手への忠告というスタイルに、アレクサンドロス大王へのアリストテレスによる秘中の秘の伝授が透けて見えてはいないだろうか。

グリニャスキの指摘するように、『秘中の秘』の提供する主たる興味は、それぞれの版における追加・挿入・削除部分を探ることにあるのかもしれない⁽⁵⁵⁾。それは作品を享受した、当時の半インテリ層 *public à demi-savant* の興味を反映するものだからである。

オジル・デ・カダルススの真骨頂は、短い抒情詩型の詩のなかで、つぎの要素を表現したことにあるのであろう。

- 1) 女性に言い寄る時間帯を、一年の四季に応じた養生法のトポスを援用して、それを一日のなかでのサイクルによって分けたこと。
- 2) 全体をおおう女性倦厭のトポス、わけても女性を養生術の材料として用いるという驚くべき(差別的な)まなざし。
- 3) 忠告というスタイルの採用(アレクサンドロスへのアリストテレスの書簡)

中世南仏の12-13世紀の俗語文学に接して、トルバドゥール詩を享受していた人々は、当然ながらこのトポスを理解していたのであった。

注

- (1) 甚野尚志・益田朋幸編, 知泉書館, 2012, pp.143-165. なお以下の論考は、ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所(早稲田大学)での報告(2012年6月30日)に重なる部分があることをお断りしておきたい。
- (2) このあたりの記述は主としてつぎによる: RYAN and SCHMITT (1982) [とくに Marie-Thérèse d'Alverny による総括: pp.132-140]; SCHMITT and KNOX (1985), pp.54-76; LANGLOIS (1927), pp.71-81; ZAMUNER (2004), pp.217-219; *id.*, (2005), pp.31-46; *id.*, (2007), pp.165-168; Françoise FERY-HUE dans *Dictionnaire des Lettres françaises, le Moyen Age*², 1982, pp.1366-1370 (article: Secret des secrets).
- (3) MÖLLER, cap.2, l.5 (p.18).
- (4) cf. KASTEN (1951-1952), p.182; *id.*, (1957), p.10; RYAN and SCHMITT (1982), pp.34-54 (Amitai I. Spitzer); ZAMUNER (2004), pp.210-218.
- (5) 二つのラテン語訳の写本は、1985年の調査の時点において合わせて600を超えている(SCHMITT and KNOX (1985), p.56)。2作品を含むこれらの写本は、それぞれ加筆・削除・改変がはなはだしく、導入部の字句も似ているために区別のつきにくいことがあり、かれらのリスト(no.81, pp.54-75)では、ヨハネスとフィリップス(第2のラテン語訳)の写本を項目としては区別していない。
- (6) cf. STEELE, p.V; RYAN and SCHMITT (1982), pp.134-135. ベーコンの『大著作』*Opus majus*の第6部「経験について」に『秘中の秘』への言及が頻繁に見いだされる(高橋憲一訳『科学の名著3 ロジャー・ベイコン』(朝日出版社, 1980年), pp.359-415)。
- (7) ZAMUNER (2005), pp.50-54, 112-114; *id.*, (2007), p.167.
- (8) BECKERLEGGE (1944).
- (9) BABBI (1984), pp.201-269.
- (10) LANGLOIS (1927), pp.71-121 [chapitre: «Secret des Secrets»: この章は第2版になって初めて収録された]. モ

- ンフランは古文書学校の卒業論文（1947年）以来、この写本の校訂はほぼ完成していると述べていた（cf. Monfrin, 1964年 p.509, n.1; 1982年 p.73）。アルベール・アンリが、この写本のワインの部の校訂と語彙の研究をおこなったときに、モンフランの準備していた校訂を参照している（HENRY (1986), p. 2, n.1）。
- (11) THORNDIKE (1923-1958), t.2, p.267. cf. THOMASSET (1982), p.71.
- (12) cf. 瀬戸「ルイ9世の図書室」 in *Études Françaises*, t.7, 2000, pp.1-20 [Richard de Fournival の *Biblionomia* に『秘中の秘』の存在は確認されていないが、「秘密の本」の部に収められていた可能性は高い。cf. Léopold DELISLE, *Le cabinet des manuscrits de la Bibliothèque nationale*, 4 vols., t.2, 1874, Paris, Imprimerie Nationale, pp.520-521; RYAN and SCHMITT (1982), p.134].
- (13) Gaston PARIS, *La littérature française au Moyen Age (XI^e - XIV^e siècle)*, Paris, Hachette, 1888; 9^e éd., [1929], § 101 (pp.159-160). cf. MONFRIN (1964), pp.529-530.
- (14) MONFRIN (1982), p.74.
- (15) MÖLLER, cap.1, l.2 (p.14).
- (16) 主としてイスラム世界のアレクサンドロス伝説をたどった詳細な研究が日本語で読める：山中由里子『アレクサンドロス変相－古代から中世イスラムへ』（名古屋大学出版会，2011年）。
- (17) MEYER (1886), 2 vols [第1巻がテキスト篇，第2巻が研究篇]。西欧中世におけるアレクサンドロス伝説については，George CARY, *The Medieval Alexander*, Cambridge, 1956, pp.105-110; éd. Piero BOITANI, Corrado BOLOGNA, Adele CIPOLLA et Mariantonia LIBORIO, *Alessandro nel medioevo occidentale*, Fondazione Lorenzo Valla, Arnoldo Mondadori, 1997. を参照。
- (18) この物語には邦訳がある：伝カリステネス，橋本隆夫訳『アレクサンドロス大王物語』，国文社，2000年（叢書アレクサンドリア図書館，VII）。
- (19) クルティウス・ルルス，谷栄一郎・上村健二訳，『アレクサンドロス大王伝』，京都大学学術出版会，2003年（西洋古典叢書）の邦訳がある。
- (20) MANZALAOU (1961), p.85.
- (21) Mortitz Steinschneider の説。cf. Brinkmann (1914), p.20, n.2.
- (22) 写本による。cf. LANGLOIS (1927) p.83, n.1 [Pierre d'Abernun の北伝語訳の vv.115-123あたりにも同種の記述がみられる]。
- (23) オック語の韻文版は書簡の語り手をガレノスにしており，これはマトフレ・エルメンガウにも引き継がれるとマンザラウイは，指摘している（MANZALAOU (1961), p.90）。なお四季の説明の部分にガレノスが2回引き合いに出される（éd. Azais et éd. Ricketts: v.6443, 6492, cf. v.5509）。これについては稿をあらためて検討したい（cf. SUCHIER (1894), p.164）。
- (24) LANGLOIS (1927), p.94, n.1.
- (25) ZAMUNER (2005), pp.57-60, 116 [ザミュネールは韻文版を P₁，散文版を P₂として分けている]。
- (26) SUCHIER (1894), pp.180-182 (cf. *id.*, (1883), pp.208-209) [277, 309行で signe diacritique を瀬戸が補い，v.320 の句読点 (*adoncs;*) を変更した。斜体も筆者による。ザミュネールの P₁に含まれる写本である]。
- (27) BRUNEL, no.327: RUGGIERI (1930), pp.203-219.
- (28) RUGGIERI, p.203. なおザミュネールが校訂版を準備している（ZAMUNER (2004), p.219, n.39）が2012年8月現在まだ刊行されていない。
- (29) ZAMUNER (2004).
- (30) RYAN and SCHMITT (1982), p.136 [Marie-Thérèse d'Alverny].
- (31) 膨大な数にのぼるラテン語写本の一覧については SCHMITT and KNOX (1985), pp.56-76 を参照。
- (32) SUCHIER (1883), pp.473-480.
- (33) *Aristotelis philosophorum maximi Secretum secretorum ad Alexandrum. De regum regimine; de sanitatis conservacione; de physionomia*, imp. Benedicti Hectors, Bononiae, 1501 (cf. ZAMUNER (2005), p.39, n.30).

- (34) SUCHIER (1883), p.531.
- (35) RYAN and SCHMITT (1982) [M.-Th. d'ALVERNY], pp.135-136 (SCHMITT and KNOX (1985), p.61に記載あり) .
- (36) SPETIA (1994), pp.405-434.
- (37) Friedrich WURMUS, *Studien zu den Deutschen und den lateinischen Prosafassungen des Pseudo-aristotelischen "Secretum secretorum"*, Dissertation, Hamburg, 1970 (瀬戸は未見) .
- (38) cf. *Dictionnaire des lettres françaises, le Moyen Age*², p.1367.
- (39) cf. RYAN and SCHMITT (1982) [M.-Th. d'ALVERNY], p.136.
- (40) MONFRIN (1982), p.74.
- (41) ほかに Willy HERMENAU, *Französische Bearbeitungen des Secretum Secretorum und ihr Verhältnis zu der lateinischen Übersetzung des Philippus Tripolitanus*, Ph.D. diss., Universität Göttingen, 1922. があるが瀬戸は未見。モンフラン、ザミュネールなどにも記載がない (cf. éd. Jeremiah HACKETT, *Roger Bacon and the Sciences: Commemorative Essays*, Leiden, Brill, 1997, pp.391-392)。
- (42) MÖLLER (1963), p.68 [メーラーは、写本中に用いられた句読点について、それを二重に繰り返すことで示す。cf. *ibid.*, p.CV].
- (43) ZAMUNER (2005), p.422; GRIGNASCHI (1980), p.64.
- (44) STEELE, p.73.
- (45) MONFRIN (1982), pp.74-75. cf. KASTEN (1951-1952), p.182, n.11.
- (46) SPETIA (1994), p.416.
- (47) KASTEN (1957), p.14, pp.70-72 (第7章) .
- (48) GRIGNASCHI (1980), p.16.
- (49) LANGLOIS (1927), pp.95-97. cf. 注(22) .
- (50) その大要は、MONFRIN (1947), pp.93-99. で知ることができる。
- (51) MONFRIN (1945-1946).
- (52) STEELE, p.191 (アラビア語版の英訳) ; KASTEN, p.41, ll.14-19 (スペイン語版) .
- (53) cf. 瀬戸の上掲論文 (注1), pp.162-163.
- (54) WILLIAMS (2003), p.144.
- (55) GRIGNASCHI (1980), p.7.

参考文献

- BABBI (Anna Maria), «Il testo franco-italiano degli "amaestramens" di Aristotele a Alessandro (Parigi, B.N., ms.821 del fondo francese)», in *Quaderni di lingue e letterature dell'Università di Verona*, IX, 1984, pp.201-269.
- BECKERLEGGE (Oliver A), *Le Secrè de Secrez by Pierre d'Abernun of Fetcham from the Unique Manuscript B.N.f.fr. 25407*, Oxford, Blackwell, Anglo-Norman Texts, no.5, 1944.
- BRINKMANN (Johannes), *Die apokryphen Gesundheitsregeln des Aristoteles für Alexander den Großen in der Übersetzung des Johann von Toledo*, Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde in der Medizin, Chirurgie und Geburtshilfe einer Hohen Medizinischen Fakultät der Universität Leipzig, 1914, pp.39-46.
- GRIGNASCHI (Mario), «L'origine et les métamorphoses du "Sirr-al-asrâr"», in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age*, t.43, 1976, pp.7-112.
- id.*, «La diffusion du "Secretum secretorum" (Sirr-al-'asrâr) dans l'Europe occidentale», in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age*, t.47, 1980, pp.7-70.
- HENRY (Albert), «Un texte œnologique de Jofroi de Waterford et Servais Copale», in *Romania*, t.107, 1986, pp. 1-37.
- HERMENAU (Willy), [c.-r. pour l'éd. de Steele], in *Zrp*, t.45, 1925, pp.375-382.

- HUNT (Tony), «A New Fragment of Jofroi de Waterford's *Segrè de segrez*», in *Romania*, t.118, 2000, pp.285-314.
- KASTEN (Lloyd), «*Poridat de las Poridades* – A Spanish Form of the Western Text of the *Secretum secretorum*», in *Romance Philology*, t.5, 1951-1952, pp.180-190.
- id.*, *Seudo Aristoteles, Poridat de las Poridades*, Madrid, Talleres de Silverio Aguirre, 1957.
- LANGLOIS (Charles-Victor), *La vie en France au Moyen Age du XIIe au milieu du XIVe siècle, vol. 3: La connaissance de la nature et du monde, d'après des écrits français à l'usage des laïcs*, Paris, Hachette, 1911, 2^e éd. 1927, pp.71-121.
- MANZALAOUÏ (Mahmoud), «*The Secreta secretorum*. The Medieval European version of “Kitàb Sirr-al-Asrâr”», in *Bulletin of the Faculty of Arts, Alexandria University*, t.15, 1961, pp.83-107.
- id.*, «The Pseudo-Aristotelian *Kitàb Sirr al-Asrâr*, Facts and Problems», in *Oriens*, t.23-24, 1974, pp.147-257.
- MEYER (Paul), *Alexandre le Grand dans la littérature française du Moyen Age*, Paris, F. Vieweg, 1886, 2 vols.
- id.*, «Notice d'un ms. messin (Montpellier 164 et libri 96)», in *Romania*, t.15, 1986, pp.161-191 (p.167, 188).
- MÖLLER (Reinhold), *Hiltgart von Hürnheim, Mittelhochdeutsche Prosaübersetzung des “Secretum secretorum”*, Berlin, Akademie-Verlag, 1963.
- MONFRIN (Jacques), «La place du *Secret des secrets* dans la littérature française médiévale», in éd. W. F. RYAN and Charles B. SCHMITT, *Pseudo-Aristotle, The “Secret of Secrets”, sources and influences*, London, The Warburg Institute, University of London, 1982, pp.73-113.
- id.*, «Le “Secret des Secrets”, Recherches sur les traductions françaises suivies du texte de Jofroi de Waterford et Seravais Copale», in *École nationale des chartes. Positions des thèses soutenues par les élèves de la promotion de 1947 pour obtenir le diplôme d'archiviste paléographe*, Paris, École des Chartes, 1947, pp.93-99.
- id.*, «Sur les sources du “Secret des Secrets” de Jofroi de Waterford et Servais Copale», in *Mélanges de linguistique romane et de philologie médiévale offerts à M. Maurice Delbouille*, Gembloux, 1964, t.II, pp.509-530.
- id.*, [c.-r. pour l'éd.de Beckerlegge], in *Bibliothèque de l'École des chartes*, t.106, 1945-1946, pp.378-380.
- RUGGIERI (Yole), «La “Dietetica” provenzale del ms. Vat. Barb. 311», in *Atti della reale Accademia delle Scienze di Torino*, t.65, 1930, pp.203-219.
- RYAN (William Francis) and SCHMITT (Charles B.), *Pseudo-Aristotle, The “Secret of Secrets”, sources and influences*, London, The Warburg Institute, University of London, 1982.
- SCHMITT (Charles B.) and KNOX (Dilwyn), *Pseudo-Aristoteles Latinus, A Guide to Latin Works falsely attributed to Aristotle before 1500*, London, The Warburg Institute, University of London, 1985, pp.54-76.
- SPETIA (Lucilla), «Un nuovo frammento dell'*Epistola Aristotelis ad Alexandrum*», in *Studi Medievali*, serie terza, t.35, 1994, pp.405-434.
- STEELE (Robert), *Opera hactenus inedita Rogeri Baconi, Fasc.V. Secretum Secretorum*, Oxford, 1920, pp.1-172, 176-266, 287, 313.
- SUCHIER (Hermann), *Denkmäler Provenzalischer Literatur und Sprache, zum Ersten Male herausgeben, Erster Band*, Halle, Max Nimeyer, 1883, pp.201-213, 473-480, 529-532.
- id.*, «Provenzalische Diätetik auf Grund neuen Materials», in *Festschriften der vier Fakultäten zum Zweihundertjährigen Jubiläum der vereinigten Friedrichs-Universität*, Philosophische Fakultät, Halle/ Wittenberg, 1894, pp.163-186.
- THOMASSET (Claude), *Une vision du monde à la fin du XIIIe siècle - commentaire du dialogue de Placides et Timéo*, Genève, Droz, 1982, pp.69-108.
- THORNDIKE (Lynn), *A History of Magic and experimental Science*, London, Macmillan / N.Y., Columbia University Press, 1923-1958, 8 vols, t.2, pp.267-278.
- WACKERNAGEL (Wilhelm), «Provenzalische Diätetik», in *Zeitschrift für deutsches Alterthum*, t.5, 1845, pp.16-17.

- id.*, [«Meinauer Naturlehre»], in *Bibliothek des Literarischen Vereins in Stuttgart*, t.22, 1851, pp.V-IX.
- WILLIAMS (Steven J.), «The Early Circulation of the Pseudo-Aristotelian *Secret of Secrets* in the West: the Papal and Imperial Courts», in *Micrologus*, t.2, 1994, pp.127-144.
- id.*, *The Secret of Secrets: the scholarly Career of a Pseudo-Aristotelian Text in the latin Middle Ages*, An Arbor, University of Michigan Press, 2003.
- ZAMUNER (Ilaria), «Per l'edizione critica dei volgarizzamenti provenzali dell'*Epistola ad Alexandrum de dieta servanda*», in *Scène, évolution, sort de la langue et de la littérature d'oc, actes du 7^e congrès international de l' AIEO, Reggio Calabria-Messina, 7-13, juillet 2002*, Roma, Viella, 2003, pp.739-759.
- id.*, «Il ms. Barb. Lat. 311 e la trasmissione dei *regimina sanitatis* (XIII-XV sec.)», in *Cultura neolatina*, t.64, 2004, pp.207-250.
- id.*, «La tradizione romanza del "Secretum secretorum" pseudo aristotelico. Regesto delle versione e dei manoscritti», in *Studi Medievali*, t. 46, 2005, pp.31-116.
- id.*, [c.-r. pour S.J. Williams, *The Secret of Secrets*], in *Studi Medievali*, t.47, 2006, pp.722-733.
- id.*, «Les versions françaises de l'*Epistola ad Alexandrum de dieta servanda*: mise au point», in *La traduction vers le moyen français, actes du II^e congrès de l'AIEMF, Poitiers, 27-29 avril 2006*, Brepols / CESCUM, 2007, pp.165-184.